

[戻るべき場所は…]

[迫り来る時代変化の荒波-53]

<序文> 町や村を呑み込んだ濁流は、そのままの勢いで、そこにあった暮らしまで丸ごと押し流してしまいました。被災した住民の重い溜息が、それを何より雄弁に物語っています。誰しも、昨日と今日がこれ程極端に様変わりする等という事は未経験だったにしても、私共の身の周りで昨今、何の変化も起こらず、何の出来事もなかったかと云えば、決してそんな訳ではありません。

気づかぬうちに徐々に、そしていつの間にか顔見知りがいなくなり、見知らぬ人が現れ、蕎麦屋が暖簾を降ろし、先々代の頃から町の顔役だった寿司屋が姿を消す…これが、全国各地で日常と化してしまっている極くありふれた光景だとすると、**問題の根はより深い処にある**—と考えるのが適切だろうと思います。

「自然災害だから仕方がない」という総括では、恐らく幕藩体制の根幹(唯一の財源である年貢—その基盤となった米作)が揺るがないよう、新田開発と治山・治水事業に心血を注いだ江戸期以前に舞い戻ってしまうでしょう。

日照りや干ばつ、洪水等、深刻な災害に苛まれた当時、深く根付いた迷信もあって、荒ぶる水神を鎮める為、うら若き女性を人柱として川に沈めたという話も伝わっている程、たとえ昔から水害とは切っても切れない関係にある風土であったとしても、**この度の被害は紛れもなく、温暖化と人口減および人口の極集中が主因**と云えるのではないかと思います。

又、単に集中豪雨や地震等の直接的な要因だけでは済まされない「**市場原理自体**」も、**間接的な被害拡大要因**と考えて恐らく間違いありません。それというのも現状、木材の市場は輸入材に押され気味で、**間伐材の流通ルートが確立・確保され難い環境にあり、山林に適時適切な手が入らず日照が限られてしまう**と、木がしっかりと成長できず、根を張り巡らす事が出来ないため、**必然的に下地の保水力を劣化させてしまう**からです。つまりこれは、**山崩れを防ぐ絶妙な生態系が形成されない事**を意味しています。

他方、人為的側面も無視できません。手間暇の掛かる木造家屋より、**パネルを使った現地組み立て式家屋(2×4工法が代表的)**が幅を利かせ、**永年蓄積されて来た大工の技術・技能を引き継ぐ者が年々減少する**という悪循環を産み、建設会社や工務店が、大工育成・養成の専門コース併設に踏み切ったという話も聞こえてきます。正しく、一旦途切れた**伝承＝技術・技能の後方移転＝**を復活させるのが如何に困難か、を端的に示す事例と云えます。

勿論、技術・技能の問題だけではありません。「**市場原理**」は、**住環境の変化にも強く作用**します。人が流出した地域では、限界集落が加速度的に増え、人の管理が行き届かなくなった森林の生命力を殺ぎ、一層の災害を招くだけでなく、里山地域での鳥獣被害の拡大も招いています。その実態はどんなものなのか—想像以上に疲弊する地域の実情と今後を、統計から追ってみる事に致します。